

ツエねずみ

宮沢賢治



ある古い家の、まつくらな天井裏に、「ツエ」という名まえのねずみがすんでいました。

ある日ツエねずみは、きよろきよろ四方を見まわしながら、ゆかしたかいどう床下街道を歩いていきますと、向こうからいたたちが、何かいいものをたくさんもって、風のように走って参りました。そしてツエねずみを見て、ちよつとたちどまって早口に言いました。

「おい、ツエねずみ。お前んとこの戸棚とだなの穴から、金米糖こんべいとうがばらばらこぼれているぜ。早く行つてひろいな。」

ツエねずみは、もうひげもぴくぴくするくらいよろこんで、いたちにはお礼も言わずに、いつさんにそつちへ走つて行きましました。ところが戸棚の下まで来たとき、いきなり足がチクリとしました。そして、「止まれ、だれかつ。」と言う小さな鋭い声がかかります。

ツエねずみはびつくりしてよく見ますと、それは蟻ありでした。蟻の兵隊は、もう金米糖のまわりに四重の非常線を張つて、みんな黒いまさかりをふりかざしています。二三十匹は金米糖を片っぱしから砕いたり、とかしたりして、巢へはこぶしたくです。ツエねずみはぶるぶるふるえてしまいました。

「ここから内へはいつてならん。早く帰れ。帰れ、帰れ。」蟻の特務曹長とくむそうちようが、低い太い声で言いました。

ねずみはくるつと一つまわつて、いちもくさんに天井裏へかけあがりました。そして巢の中へはいつて、しばらくねころんでいましたが、どうもおもしろくなくて、おもしろくなくて、たまりません。蟻ありはまあ兵隊だし、強いからしかたもないが、あのおとなしいいたちめに教えられて、戸棚とだなの下まで走つて行つて蟻ありの曹長そうちようにけんつくを食うとは、なんたるしやくにさわるること

だとツエねずみは考えました。そこでねずみは巢からまたちよろちよろはい出して、木小屋の奥のいたちの家にやって参りました。

いたちはちようど、とうもろこしのつぶを、歯でこつこつかんで粉にしてみました。が、ツエねずみを見て言いました。

「どうだ。金米糖がなかつたかい。」

「いたちさん。ずいぶんお前もひどい人だね。私わたしのような弱いものをだますなんて。」

「だましゃせん。たしかにあつたのや。」

「あるにはあつても、もう蟻が来てましたよ。」

「蟻が、へい。そうかい。早いやつらだね。」

「みんな蟻がとつてしまいましたよ。私のような弱いものをだますなんて、償まどうてください。償まどうてください。」

「それはしかたない。お前の行きようが少しおそかったのや。」
「知らん、知らん。私のような弱いものをだまして。償うてください。償うてください。」

「困つたやつだな。ひとの親切をさかさまにうらむとは。よしよし。そんならおれの金米糖をやろう。」

「償うてください。償うてください。」

「えい、それ。持つて行け。てめえの持つてるだけ持つてうせちまえ。てめえみたいな、ぐにやぐにやした男らしくもねえやつは、つらも見たくねえ。早く持つてるだけ持つてどつかへうせろ。」
「私たちはプリプリして、金米糖を投げ出しました。ツエねずみはそれを持つてるだけたくさんひろつて、おじぎをしました。いたちはいよいよおこつて叫びました。」

「えい、早く行つてしまえ。てめえの取つた、のこりなんかう

じむしにでもくれてやらあ。」

ツエねずみは、いちもくさんに走つて、天井裏の巢へもどつて、金米糖をコチコチ食べました。

こんなぐあいですから、ツエねずみはだんだんきらわれて、たれもあんまり相手にしなくなりました。そこでツエねずみはしかたなしに、こんどは、柱だの、こわれたちりとりだの、バケツだの、ほうきだのと交際をはじめました。中でも柱とは、いちばん仲よくしていました。

柱がある日、ツエねずみに言いました。

「ツエねずみさん、もうじき冬になるね。ぼくらはまたかわいてミリミリ言わなくちゃならない。お前さんも今のうちに、いい夜具のしたくをしておいた方がいいだろう。幸いぼくのすぐ頭の上に、すずめが春持つて来た鳥の毛やいろいろ暖かいもの

がたくさんあるから、いまのうちに、すこしおろして運んでおいたらどうだい。僕の頭は、まあ少し寒くなるけれど、僕は僕でまたくふうをするから。」

ツエねずみはもつともと思いましたが、さつそく、その日から運び方にかかりました。

ところが、途中に急な坂が一つありましたので、ねずみは三度目に、そこからストーンとこぼれ落ちました。

柱もびつくりして、

「ねずみさん、けがはないかい。けがはないかい。」と一生けん命、からだを曲げながら言いました。ねずみはやつと起き上がって、それからかおをひどくしかめながら言いました。

「柱さん。お前もずいぶんひどい人だ。僕のような弱いものをこんな目にあわすなんて。」

柱はいかにも申しわけがないと思つたので、

「ねずみさん、すまなかつた。ゆるしてください。」と一生けん命わびました。

ツエねずみは凶にのつて、

「許してくれもないじゃないか。お前さえあんなこしやくなさしずをしなければ、私はこんな痛い目にもあわなかつたんだよ。償まどつておくれ。償つておくれ。さあ、償つておくれよ。」

「そんなことを言つたつて困るじゃありませんか。許してくださいよ。」

「いいや、弱いものをいじめるのは私はきらいなんだから、償つておくれ。償つておくれ。さあ、償つておくれ。」

柱は困つてしまつて、おいおい泣きました。そこでねずみも、しかたなく、巢へかえりました。それから、柱はもうこわがつ

て、ねずみに口をききませんでした。

さてそののちのことですが、ちりとりはある日、ツエねずみに半分になった最中もなかを一つやりました。するとちょうどその次の日、ツエねずみはおなかが痛くなりました。さあ、いつものとおりツエねずみは、まどつておくれを百ばかりも、ちりとりに言いました。ちりとりもあきれて、もうねずみとの交際はやめました。

また、そののちのことですが、ある日バケツはツエねずみに、せんたくソーダのかけらをすこしやって、

「これで毎朝お顔をお洗いなさい。」と言いましたら、ねずみはよろこんで次の日から、毎日それで顔を洗っていました。そのうちねずみのおひげが十本ばかり抜けました。さあツエねずみは、さつそくバケツへやって来て、償まどつておくれ償つてお

くれを、二百五十ばかり言いました。しかしあいにくバケツにはおひげもありませんでしたし、償うわけにも行かず、すっかり参ってしまったて、泣いてあやまりました。そして、もうそれからは、ちよつとも口をききませんでした。

道具仲間は、みんな順ぐりにこんなめにあつて、こりてしまいましたので、ついにはだれもツエねずみの顔を見るといそいでわきの方を向いてしまふのでした。

ところがその道具仲間に、ただ一人だけ、まだツエねずみとつきあつてみないものがありました。

それは針がねを編んでこさえたねずみ捕り^とでした。

ねずみ捕りは全体、人間の味方なはずですが、ちかごろは、どうも毎日の新聞にさえ、猫^{ねこ}といつしよにお払い物という札をつけた絵にまでして、広告されるのですし、そうでなくても、元

来人間は、この針金のねずみ捕りを、一ぺんも優待したことは
ありませんでした。ええ、それはもうたしかにありませんとも。
それに、さもさわるのさえきたないようにみんなから思われて
います。それですから実は、ねずみ捕りは人間よりはねずみの
方に、よけい同情があるのです。けれども、たいていのねずみ
はなかなかこわがつて、そばへやつて参りません。ねずみ捕り
は、毎日やさしい声で、

「ねずちゃん、おいで。今夜のごちそうはあじのおつむだよ。
お前さんの食べる間、わたしはしつかり押えておいてあげるか
ら。ね、安心しておいで。入り口をパタンとしめるようなそん
なことをするもんかね。わたしも人間にはもうこりこりして
るんだから。おいでよ。そら。」

なんてねずみを呼びかけますが、ねずみはみんな、

「へん、うまく言つてらあ。」とか、

「へい、へい。よくわかりましてございます。いずれ、おやじや、せがれとも相談の上で。」とか言つてそろそろ逃げて行つてしまします。

そして朝になると、顔のまつ赤な下男かげなんが来て見て、

「またはいらない。ねずみももう知つてるんだな。ねずみの学校で教えるんだな。しかしまあもう一日だけかけてみよう。」と言いながら、新しいえさととりかえるのでした。

今夜も、ねずみ捕りは叫びました。

「おいでおいで。今夜はやわらかな半ぺんだよ。えさだけあげるよ。大丈夫さ。早くおいで。」

ツエねずみが、ちようど通りかかりました。そして、
「おや、ねずみ捕りさん、ほんとうにえさだけをくださるんで

すか。」と言いました。

「おや、お前は珍しいねずみだね。そうだよ。えさだけあげるんだよ。そら、早くお食べ。」

ツエねずみはプイツと中にはいつて、むちやむちやむちやつと半ぺんを食べて、またプイツと外へ出て言いました。

「おいしかったよ。ありがとう。」

「そうかい。よかったね。またあすの晩おいで。」

次の朝、下男が来て見ておこつて言いました。

「えい。えさだけとつて行きやがった。ずるいねずみだな。しかしとにかく中にはいったというのは感心だ。そら、きようはいわし鯛だぞ。」

そして鯛を半分つけて行きました。

ねずみ捕りは、鯛をひっかけて、せっかくツエねずみの来る

のを待っていました。

夜になって、ツエねずみはすぐ出て来ました。そしていかにも恩に着せたように、

「今晚は、お約束どおり来てあげましたよ。」と言いました。

ねずみ捕りは少しむつとしたが、無理にこらえて、

「さあ、食べなさい。」とだけ言いました。

ツエねずみはピイツとはいつて、ピチャピチャピチャツと食べて、またピイツと出て来て、それから大風おおふうに言いました。

「じゃ、あした、また、来て食べてあげるからね。」

「ブウ。」とねずみ捕りは答えました。

次の朝、下男が来て見て、ますますおこつて言いました。

「えい。ずるいねずみだ。しかし、毎晩、そんなにうまくえさだけ取られるはずがない。どうも、このねずみ捕りめは、ねず

みからわいろをもらつたらしいぞ。」

「もらわん。もらわん。あんまり人を見そこなうな。」とねずみ捕りはどなりましたが、もちろん、下男の耳には聞こえません。きょうも腐つた半ぺんをくつつけていきました。

ねずみ捕りは、とんだ疑いを受けたので、一日ぶんぶんおこつていました。夜になりました。ツエねずみが出て来て、さも大儀たいぎらしく言いました。

「あああ、毎日ここまでやって来るのも、並みたいていのこつちやない。それにごちそうと云つたら、せいぜい魚さかなの頭だ。いやになつちまう。しかしまあ、せつかく来たんだからしかたない。食つてやるとしようか。ねずみ捕りさん。今晚は。」

ねずみ捕りは、はりがねをぷりぷりさせておこつていましたので、ただ一こと、

「お食べ。」と言いました。ツエねずみはすぐプイツと飛びこみました。半ぺんのくさっているのを見て、おこつて叫びました。

「ねずみとりさん。あんまりひどいや。この半ぺんはくさつてます。僕のような弱いものをだますなんて、あんまりだ。償まじつてください。償まじつてください。」

ねずみ捕りは、思わず、はり金をりゅうりゅうと鳴らすくらい、おこつてしまいました。そのりゅうりゅうが悪かつたので、す。

「ピシャツ。シインン。」えきについていたかぎがはずれて、ねずみ捕りの入り口が閉じてしまいました。さあもうたいへんです。

ツエねずみはきちがいのようになって、

「ねずみ捕りさん。ひどいや。ひどいや。うう、くやしい。ねずみ捕りさん。あんまりだ。」と言いながら、はりがねをかじるやら、くるくるまわるやら、地だんだふむやら、わめくやら、泣くやら、それはそれは大きすぎです。それでも、償ってください、償ってください、もう言う力がありませんでした。

ねずみ捕りの方も、痛いやら、しやくにさわるやら、ガタガタ、ブルブル、リュウリュウとふるえました。一晚そうやってとうとう朝になりました。

顔のまっ赤な下男が来て見て、こおどりして言いました。

「しめた。しめた。とうとう、かかった。意地の悪そうなねずみだな。さあ、出て来い。こぞう。」

ツエねずみ

ツエねずみ

底本：「童話集 銀河鉄道の夜 他十四編」岩波文庫、岩波書店
1951（昭和 26）年 10 月 25 日第 1 刷発行
1966（昭和 41）年 7 月 16 日第 18 刷改版発行
2000（平成 12）年 5 月 25 日改版第 71 刷発行

入力：のぶ

校正：noriko saito

2005 年 5 月 12 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。